

英語知覚動詞構文の証拠性用法に関する認知文法的考察

こうの　わたる
河野　　亘

京都大学大学院

lt031073@gmail.com

1. はじめに

人間の知覚という営みには身体活動や高次の認識が密接に関わっている。知覚に基づく推論や情報伝達は、何らかの知覚的証拠から別の個体の存在を察知したり、意図を感じ取ったりする行動に大きな役割を果たす。知覚プロセスは推論や判断に深く関わり、それゆえ言語学においては、モダリティや叙実性 (factivity) などとの関連でしばしば議論されてきた。また、これらの概念に加え、伝統的に証拠性 (evidentiality) との関わりが指摘される。証拠性とは、話者が真実と捉えている命題に対する情報源 (information source) を表すものであり、認識的モダリティと関連付けて（もしくは対比させて）研究されることが多い。

近年、言語を一般的認知能力との関わりの中で捉えようとする認知言語学の枠組みに基づき、モダリティおよびその関連現象の分析がなされつつある。認知言語学の体系では、言語は、人間による主体的な概念化の所産であると考え、言語の主観性や身体性の関与に注目する。認知言語学による知覚プロセスの研究は、知覚と、知覚に伴う身体活動との関係に関するものが支配的である。一方で、知覚・認識を中心的に議論した研究は比較的少ないといえる。英語の知覚動詞構文である連結的知覚動詞構文は、感覚情報の獲得や受容に密接に関わり、身体活動・身体経験を如実に反映した振る舞いを見せる現象のひとつであるが、これにおいても、認識的概念との関係を中心に議論したものはほとんどない。

本論文では、主に連結的知覚動詞構文について、証拠性や叙実性といったモダリティに関わる言語事実の記述を、経験者主語の知覚動詞構文と比較しつつ行う。方法論としては、身体論的アプローチや Langacker の認知文法理論のモデルの 1 つであるコントロールサイクルを援用し、記述および考察する。

本論の構成は次の通りである。まず、第 2 節で証拠性や英語知覚動詞構文をめぐる先行研究を概観し、連結的知覚動詞構文と経験者主語の知覚動詞構文との比較を行う。第 3 節では、本論における理論的枠組みを提示し、連結的知覚動詞構文を対象として記述・考察を行う。第 4 節では、本論のまとめを述べる。

2. 知覚動詞と証拠性に関する先行研究

連結的知覚動詞構文は、しばしば証拠性との関連で記述されてきた (cf. Anderson 1986, Chafe and Nichols 1986, Whitt 2011 など) を参照)。連結的知覚動詞構文は (1) に見られる

ようにさまざまな補部をとるが、Gisborne (2010) はこれらの事例はいずれも聴覚に基づく推論のような証拠的意味を表すものであると述べている。

- (1) a. Jane sounded scared. (形容詞)
 b. Jane sounded a fool. (名詞句)
 c. Jane sounded like a fool. (like 前置詞句)
 d. Jane sounded to be a fool/ scared. (to be 句)
 e. Jane sounded like she was scared. (like 節)

(Gisborne 2010: 251)

Gisborne はさらに、証拠性の観点から用法の分類を提案している。これに関しては 2.3 節以降で詳しく見ていく。

また、以下のような、定形節を補部にとる経験者主語構文も証拠的な意味を示すと思われる。

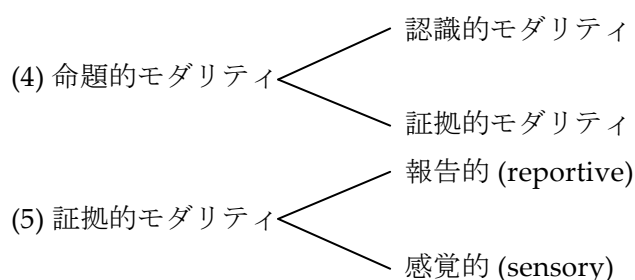
- (2) I could hear from her quivering voice that Peter had been fighting.
 (3) I heard from John that Peter had been fighting.

(Dik and Hengeveld 1991:248)

2.1 節では証拠性について簡潔に述べる。2.2 節では Viberg (1983) による伝統的な知覚動詞の分類を参照する。そのうえで、経験者主語構文、連結的知覚動詞構文の順に先行研究を概観する。

2.1 証拠性

証拠性の議論は主に、意味的な分類と、その形式的な現れを問題にしたものに分けることができる。まず意味論的議論に関しては、モダリティの下位分類として位置づけた Palmer (2001) がある¹。Palmer (2001) によれば、証拠性（もしくは証拠的モダリティ）とは、命題に関する話し手の判断に関わる「命題的モダリティ」の下位カテゴリーであり、話し手が真実と捉えている命題内容に対する情報源 (information source) を表すものである。



(Palmer 2001: 22)

報告的証拠性は他者からの報告を情報源とするものであり、感覚的証拠性は五感を情報源とする。

個別言語における証拠性の表れ方には次の2通りがある (Aikhenvald 2004)。

- (6) a. 文法的証拠性 (grammatical evidentiality) : 文法的カテゴリー (機能語) によるコード化
- b. 語彙的証拠性 (lexical evidentiality) : 語彙的な表現 (内容語) によるコード化

文法的証拠性は特にタリアナ語 (Tariana, Arawakan languages; Brazil) やヤラワラ語 (Jarawara, Arawakan languages; Brazil) などの少数言語に見られるとされる。こういった言語では、屈折や機能語といった文法的要素に証拠性の意味が含まれる傾向がある。一方で、印欧語族の言語の多くでは文法的証拠性は見られず、証拠性は語彙的な表現の中に遍在していることが多い。たとえば、英語では、基本的に証拠性は特に2節冒頭で見たような知覚動詞や認識・思考動詞、法副詞 (e.g. *evidently*) などの用法に見られるとされる²。

2.2 知覚動詞の3分類

Viberg (1983) は、知覚動詞に対して3つの分類を認めている。3分類は以下の表1のように、それぞれ活動 (activity)、経験 (experience)、コピュラ (source-based copulative) の動詞クラスに分かれる。

表1 知覚動詞の3分類 (Viberg 1983: 128)³

	ACTIVITY (CONTROLLED)	EXPERIENCE (NONCONTROLLED)	SOURCE-BASED COPULATIVE (STATE)
Sight	look at	see	look
Hearing	listen to	hear	sound
Touch	feel ₁	feel ₂	feel ₃
Taste	taste ₁	taste ₂	taste ₃
Smell	smell ₁	smell ₂	smell ₃

活動の知覚動詞クラスと経験を表す知覚動詞クラスのちがいは、知覚行為における知覚者の意図の有無にある。活動の動詞 (look at, listen to, ...) は意図的行為であり、経験の動詞 (see, hear, ...) は非意図的な行為である。コピュラ用法は、叙述形容詞などの補語をとる自動詞用法の知覚動詞である。経験者主語構文と連結的知覚動詞構文はそれぞれ、経験とコピュラのタイプの知覚動詞が生起する。

2.3 経験者主語構文

経験者主語構文のとり補部とそれが表す意味の対応関係はしばしば指摘される。Dik and Hengeveld (1991) によれば、経験者主語の知覚動詞構文には定形節を補部にとる 2 種類の構文があり、直接知覚とは異なる意味を表す。それらは「命題内容の心的知覚 (Mental perception of propositional content)」と「発話行為の命題内容の受容 (Reception of propositional content of speech act)」に分かれる。命題内容の心的知覚とは知覚に基づく推論を指し、発話行為の命題内容の受容とは他者からの伝聞的知識を指す。以下がそれぞれの例である。

(7) a. I could hear from her quivering voice that Peter had been fighting.

b. I saw on her face that Peter had been fighting.

(8) a. I heard from John that Peter had been fighting.

b. I saw in the newspaper that Peter had been fighting.

(Dik and Hengeveld 1991: 247)

例が示すように、(7)の命題内容の心的知覚の例は Palmer (2001) における感覚的証拠性に相当する意味を表し、(8)の発話行為の命題内容の受容の例は報告的証拠性に相当する意味を表すといえる。特に取り上げておきたいのは、これらの構文間に見られる次の差異である。

(9) I could taste that the toast was burnt (* but it turns out that it wasn't).

(Dik and Hengeveld 1991:248)

(10) I heard (from John) that Mary had caught a cold (but it turns out that she hadn't).

(ibid.)

感覚的証拠性の事例は、that 節の命題内容が半叙実的 (semifactive) であり、真実性を否定する but 以下のような節と意味的に矛盾する。一方で、報告的証拠性の事例は、that 節の命題内容が非叙実的 (nonfactive) であり、真実性を否定する節が共起できる。つまり、経験者主語構文に関して、感覚的証拠性を表すものは話し手にとって事実と捉えられる内容を示し、報告的証拠性を表すものは話し手にとって事実とは異なる内容をも示しうる⁴。

2.4 連結的知覚動詞構文

Gisborne は、証拠性や 叙実性といった法的性質と知覚の直接性の観点から、連結的知覚動詞構文の用法を次のように分類している。推論を含まない知覚的印象を表す用法 (e.g. *This music sounds lovely.*)、知覚者の推論を含む判断を表す用法 (e.g. *He sounds foreign.*)、主語が直接の知覚対象でなく間接的な知覚対象となる用法 (e.g. *(I've heard the forecast and) tomorrow's weather sounds fine.*) である。

(11) 属性表示用法 (Attributory use)

- a. This music sounds lovely.
- b. Peter's face looks lived-in.
- c. This cloth feels sticky.
- d. This food smells spicy.
- e. This food tastes rancid.

(Gisborne 2010: 245)

属性表示用法は *be* 動詞による叙述文と類似した意味をもつとされる。つまり、(11) のような価値評価の形容詞補語を取る場合、特定の五感の知覚を表す叙述形容詞文と同等の意味を持つ属性文的な用法であるとされる ((11a) に対応する例: *This music is lovely.*)。このことは、(12) のようにその事実性を打ち消す節を後続させることができないことにも表れている。

(12) a. *This music sounds lovely, but it isn't really.

- b. *Peter's face looks lived-in, but it isn't really.
- c. *This cloth feels sticky, but it isn't really.
- d. *This food smells spicy, but it isn't really.
- e. *This food tastes rancid, but it isn't really.

(Gisborne 2010: 245)

次の2用法は証拠性に関わる用法である。直接証拠用法、間接証拠用法の2種類が指摘され、(13), (14) がその例である。

(13) 直接証拠用法 (Evidential-1 use)

- a. He sounds foreign.
- b. He looks ill.
- c. The fabric feels old.
- d. The wine smells delicious.
- e. The food tastes fantastic.

(14) 間接証拠用法 (Evidential-2 use)

- a. (I've heard the forecast and) tomorrow's weather sounds fine.
- b. (I've seen the forecast and) tomorrow's weather looks fine.

(Gisborne 2010: 245)

これらの用法では、属性表示用法の場合とは異なり、事実性を打ち消す節を後続させることが可能である（(13a) の場合： *He sounds foreign but he isn't.*）。また、*To judge by*～句を用いて言い換え可能である（(13a) の場合： *To judge by his sound, he is foreign.*）。こういった点で、証拠に基づく推論を表す用法であるとされる。

また、直接証拠用法と間接証拠用法の違いは、主語の指示対象が直接の知覚対象であるかどうかにある。直接証拠用法では、主語が直接的な知覚対象として言語化される。一方、間接証拠用法では、主語の「明日の天気」(*tomorrow's weather*) は直接知覚される対象ではなく、天気予報 (*the forecast*) という間接的な情報源によって認識されるものである。認知文法の観点でいえば、他者の発言やメディアなどの情報伝達手段を参照点 (Langacker 1993) として知覚し、そこからターゲットとなる知識を獲得するプロセスといえる⁵。

以上のように Gisborne (2010) は用法の分類を行っているが、3 分類した用法と他の構文間の関係についての説明に乏しい。また、身体的・認知的側面の考察が希薄であり、動機付けが明確でないという問題がある。Gisborne (2010) は主節の動詞が非定形節を命題として解釈させると述べており、「当該の知覚動詞が補部の指示対象を命題として “modalize” することにより、知覚動詞のモーダル的な特性 (*the modal nature*) を表す」(ibid.: 252) としている。連結的知覚動詞構文に生起する動詞は文の開始者 (*initiator*) が命題であり、着点 (*endpoint*) が話し手であるという「主観的（主体的）」性質をいわゆる動機づけとして捉えているようであり、この点で認知文法による説明 (cf. Taniguchi 1997) と多少の関わりがあるかもしれないが、詳細な説明には至っていない。

2.5 先行研究のまとめ

証拠性を表す経験者主語構文と連結的知覚動詞構文の共通点と相違点は、次の(15), (16)のようにまとめられる。

(15) 経験者主語構文と連結的知覚動詞構文の共通点

- a. 五感の動詞で感覚的証拠性を示す構文を持つ
- b. 視覚・聴覚の動詞で報告的証拠性を示す構文を持つ
- c. 報告的証拠性の例を示す例は非叙実的に解釈されうる

(16) 経験者主語構文と連結的知覚動詞構文の相違点

- a. 連結的知覚動詞構文は多様な補部に当てはまるが、経験者主語構文は定形補部をとる構文に限られる
- b. 感覚的証拠性を示す例の叙実性の相違

(16b) の叙実性の差異は以下のとおりである。

(17) 証拠性を表す経験者主語構文の叙実性

- a. 感覚的証拠性 ... 叙実的 (factive)
- b. 報告的証拠性 ... 非叙実的 (non-factive)

(18) 証拠性を表す連結的知覚動詞構文の叙実性

- a. 感覚的証拠性 ... 非叙実的 (non-factive)
- b. 報告的証拠性 ... 非叙実的 (non-factive)

以上が両構文の意味・用法における共通点・相違点である。次節では、認知文法の立場から、知覚動詞構文の証拠性に関わる用法とその動機づけに関して考察する。

3. 証拠性をめぐる用法に関する認知言語学的分析

2 節で見た経験者主語構文と連結的知覚動詞構文の差異はどのように説明すべきであろうか。3.1 節では look と see の間の視覚経験上の差異に関する分析（深田 2001）を参照し、同様の分析を sound と hear に対して応用する。3.2 節では Langacker (2002) のコントロールサイクルを援用し、主に連結的知覚動詞構文の叙実性の差異について論じる。3.3 節では、連結的知覚動詞構文が示す証拠性の分類について記述する。

3.1 look v.s. see, sound v.s. hear 間の差異への身体論的説明

ここでは、2 節で見た叙実性の違いが、動詞に内在する身体論的性質を捉えることで説明可能であることを示す。まず、深田 (2001) による視覚動詞 look, see の用法の分析を見、同様の分析が sound, hear 間にも応用可能であることを示す。

深田 (2001) は look の連結的知覚動詞構文の成立と主体化との関わりを考察している。連結的知覚動詞構文を成立させた視覚動詞 look と、そうでない see の視覚経験を比較するかたちで、神経心理学の知見や Gruber (1967)、山梨 (1995) をもとに、以下のように整理している（深田 2001: 27）。

(19) <視覚動詞 look の意味拡張の背後にある視覚経験>

- a. (運動) ある対象あるいはある出来事に目を向ける
- b. (知覚) その対象あるいはある出来事の視覚的印象を得る
- c. (高次認知) その対象あるいはある出来事の視覚的印象からそれが何であるか判断したり、またそこからさらに何かを推論したりする
- d. (運動) その対象あるいは出来事に対処する

(20) <視覚動詞 see の意味拡張の背後にある視覚経験>

- a. (運動) ある対象あるいはある出来事に目を向け、それを（完全に）視界に捉える

- b. (知覚) その対象や出来事の視覚情報を得る
- c. (高次認知) その対象や出来事を理解し、それらについて何らかの推論を行う
- d. (運動) その対象あるいは出来事に対処する

深田 (2001) は、視覚動詞 **look** がコピュラ用法を成立させる過程で推論の意味を発展させた要因の一部を、上記の視覚経験の差に帰着させて説明している。視覚動詞 **look** は、対象に目を向けるという原義をもつのに対し、視覚動詞 **see** は、目を向けるだけでなく、それを視界に捉える段階までを本来的に含意している。それが言語的には、視覚動詞 **look** と **see** の意味のちがいとして現れ、視覚対象を視界に捉えることを含意しないという視覚経験を反映した **look** は真実性を前提としないのに対し、**see** は真実性を前提とする、と論じられている。

深田 (2001) は、以上の説明を他の知覚モダリティに敷衍してはいない。しかし実際には以上に見た **look** と **see** の比較と並行的に、**sound** と **hear** の意味拡張の背後にある聴覚経験も、以下のようにまとめることができよう。

(21) <聴覚動詞 **sound** の意味拡張の背後にある聴覚経験>

- a. (知覚) ある対象の聴覚刺激が発散され、その対象あるいはある出来事の聴覚的印象を得る
- b. (高次認知) その対象あるいはある出来事の聴覚的印象からそれが何であるか判断したり、またそこからさらに何かを推論したりする

(22) <聴覚動詞 **hear** の意味拡張の背後にある聴覚経験>

- a. (知覚) ある対象あるいはある出来事からの聴覚刺激を（完全に）聴覚器が捉え、その対象や出来事の視覚情報を得る
- b. (高次認知) その対象や出来事を理解し、それらについて何らかの推論を行う
- c. (運動) その対象あるいは出来事に対処する（「従う」の意味など）

聴覚は、人間が外界を知覚する際の経験における経験者と知覚刺激 (**stimulus**) との非対称関係でいえば、刺激の際立ちの高い知覚経験である。経験者主語構文に生起する **hear** も連結的知覚動詞構文に生起する **sound** も、「耳を傾ける」といった身体運動は含意されない。しかし、**hear** では視覚動詞 **see** のように、刺激を捉えるという経験が含意される。さらに、連結的知覚動詞構文に現れる聴覚動詞 **sound** は、**hear** や **listen (to)** と異なり、(23)のような経験者側の感覚の受容ではなく、刺激の発散のみを記号化する自動詞用法を持つ。

- (23) a. The food began to smell.
 b. The bell began to sound.

(谷口 2005: 221)

こういった相違から、sound と hear は look/see の差異と同様、連結的知覚動詞構文に生起する sound では真実性を前提としないのに対し、経験者主語構文に生起する hear では真実性が前提となる用法が発達したと考えられる。

3.2 コントロールサイクルによる叙実性の差異の記述

本節では、Langacker (2002, 2009) における認知モデルであるコントロールサイクル (control cycle) に基づき、連結的知覚動詞構文の記述を行う。特に、先行研究で指摘されている連結的知覚動詞構文の叙実性の差異に関する記述において、のちに見る統語的・意味的な観点から、認識的コントロールサイクル (epistemic control cycle) で包括的に捉えることができることを示す。

ただ、ここでことわっておきたいのは、この認知モデルは非常に広範なプロセスを獲得・回避の概念で捉えようとするモデルであり、証拠性における情報源の種類や現実性への組み込みの手段については一般化されているということである (Langacker 2009: 201)。人間は、知覚、推論、伝聞などによってさまざまな知識を主体的に獲得し、それらが現実性の一部として組み込まれるが、コントロールサイクル自体にはそういった認識レベルの獲得の様態は捨象されている。そのため、証拠性の分類に関しては、3.3 節で独立的に考察する。

3.2.1 コントロールサイクルとは

コントロールサイクルは、多様なプロセスを、ある存在が対象を自らの統制下に置く過程として統合した認知モデルである。Langacker はこの認知モデルを導入し、無秩序に遍在するかのようにみえるさまざまな言語表現を統一的に捉えようとしている。最も一般的なモデル (図 1) では、存在は「主体 (actor)」、対象は「ターゲット (target)」と呼ばれる。主体を取り囲む領域である「ドミニオン (dominion)」は、主体が支配力を行使する領域を示す。全体の領域である「フィールド (field)」は主体の認識の領域 (または意識のスコープ) である。コントロールサイクルにおいて、相互作用のプロセスは基準段階 (baseline)、潜在的段階 (potential)、活動段階 (action)、結果段階 (result) の 4 つの「段階 phase」から構成される。基準段階は、主体・ターゲット間の相互作用の起こる前の静止状態 (stasis) である。潜在的段階は、ターゲットが主体の認識領域内に現れる段階である。活動段階 (action) は主体・ターゲット間の相互作用が起こる動的な段階である。結果段階は、ターゲットが主体のドミニオン内に置かれ、支配される段階である。このモデルの根底には、<力 (force)>と<緊張状態 (tension)>、もしくは<変化>と<連続性>という相反する状況が交互に循環し続けていくという考え方が存在する。

(24) コントロールサイクルの4段階

- a. 基準段階：主体・ターゲット間の相互作用の起こる前の静止状態 (stasis) の段階。
主体の認識領域（潜在的な相互作用のスコープ (scope of potential interaction)）内には、ドミニオン内にいくつかの存在を支配している主体以外は存在しない。
- b. 潜在的段階：ターゲットが主体の認識領域内に現れる段階。静的な緊張状態 (tension)。
- c. 活動段階：主体・ターゲット間の相互作用が起こる動的段階。
- d. 結果段階：ターゲットが主体のドミニオン内に置かれ、支配される段階。相互作用が起こった後の安定的・静的な状態 (stasis)。

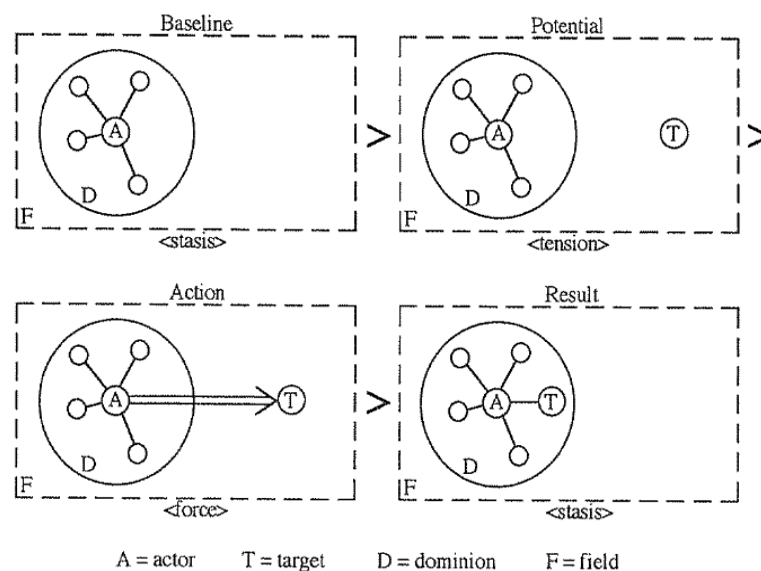


図1 コントロールサイクル (Langacker 2002: 193)

具体事例としてネコ（主体）がネズミ（ターゲット）を捕獲するプロセスを挙げておく。まず、休息中など、ネコがネズミの存在には気付いていない段階（基準段階）があり、ネコの視野の中にネズミの存在が含まれ、ネコが行動を起こすまでの段階（潜在的段階）を経て活動に移行する。潜在的段階には、活動に至るまでの物理的予備動作や、心理的な警戒が含まれる。そして、ネコによるネズミへの直接の捕獲動作（e.g. 飛びかかる、捕まえる、傷付けるなど）の結果、最終的にネズミが捕獲された段階（結果段階）に至る。これは物理的行為の例であるが、これに類似した認知過程が、知覚や高次認識、社会的な活動などの多様なプロセスの概念的基盤をなしている。

コントロールサイクルの基盤となる認知モデルは、プロセスを動的な事象と静的な状態の循環 (cycle) からなる構造として捉える。動的な事象とは、何らかの変化を含む有界的な事象である。静的な状態とは、動的変化を含まない緊張 (tension) を伴う非有界的な状態

である。この総体的な構造を「緊張性サイクル (Tension Cycle) 」と呼ぶ (Langacker 2009: 305) 。コントロールサイクルは、この緊張性サイクルを基盤とし、主体とターゲットの間のさまざまな相互作用を「獲得」 (Capture) と「回避」 (Avoidance) の概念で捉えたものである (ibid.: 306) 。獲得は、主体の認識領域に侵入してきた存在・ターゲットを支配する行為である。回避は、主体の認識領域から排除する行為である。

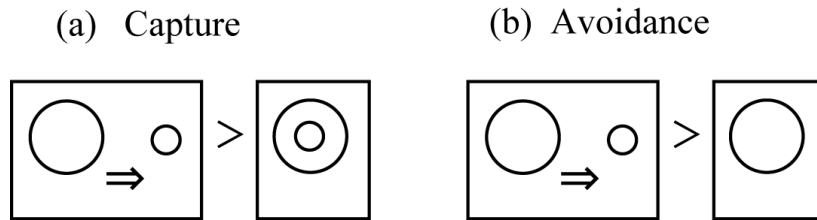


図2 獲得と回避

物理レベルの獲得は、対象を主体の領域（縄張りや体内など）に取り込むプロセスである。知覚レベルの獲得は、ある感覚を感覚情報として獲得、または受容するプロセスである。認識レベルの獲得は、ある命題の事実認識に関わるプロセスである。そして社会レベルの獲得は、ある対象を主体の社会的領域に受け入れるプロセスである。

表2 さまざまな獲得・回避

(事象の種類)	(獲得の例)	(回避の例)
物理的事象	捕獲、捕食、モノの授受	排除、駆逐
知覚的事象	五感・体性感覚などの獲得・受容	感覚の喪失・麻痺
認識的事象	命題の認識や確信	命題の否定
社会的事象	他者の受容、承認	拒絶、疎外、差別

3.2.2 認識レベルのコントロールサイクル

現実性の概念などの認識や思考、推論の意味に関わるプロセスには、認識レベルのコントロールサイクルが適用される。認識や思考に関わるプロセスのコントロールサイクルでは、潜在的段階は順に、察知 (formulation) 、評価 (assessment) 、意向 (inclination) の3つの場面に区分される。察知、評価、意向のサイクルにも緊張状態と力の循環があり、察知は未完了プロセス、評価は完了プロセス、意向は未完了プロセスをなす。

(25) 認識的コントロールサイクルの潜在的段階 (Potential) における下位区分

- a. 察知 (Formulation) : 命題を潜在的な考慮の対象として導入する段階。
- b. 評価 (Assessment) : 主体が命題の現実性を評価し、命題の潜在的な選択を行う段階。
- c. 意向 (Inclination) : 認知主体の命題に対する判断が方向づけられる段階。

- (26) a. I am aware of the possibility that politicians occasionally distort the truth. [察知]
 b. She {wondered / considered} whether anything could be done to alleviate the situation. [評価]
 c. He {thinks / believes / suspects} they will never agree to his offer. [意向]
 d. She {learned / discovered / decided / concluded} that her lawyer could not be trusted. [活動]
 e. He {believes / knows / thinks / accepts} that the earth is round. [結果]

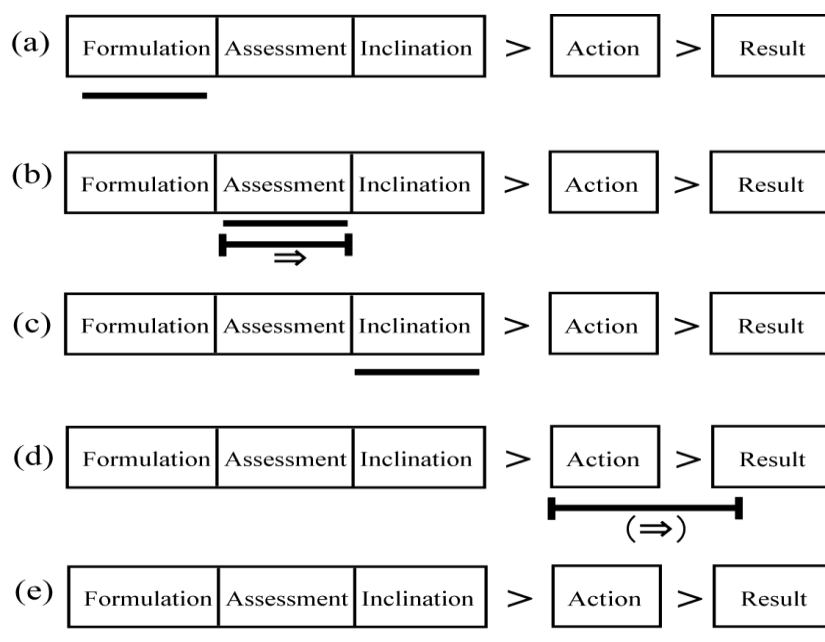


図3 認識レベルのコントロールサイクル

また、意向段階ではいわゆる「否定辞繰り上げ現象 (negative raising)」が見られる (Langacker 2009: 263)。これは、否定辞繰り上げ現象が、認知主体の判断が方向づけられる最中であり、命題内容の真偽が不確定であることに由来する。下に示すように、この現象はコントロールサイクルにおける他の段階では見られない。以下はそれぞれ、人称用法、非人称用法の述語の例である。

- (27) a. I don't believe she has any children. [意向]
 = I believe she doesn't have any children.
 b. I didn't believe (his story) that he had to work late. [活動]
 ≠ I believe (his story) that he didn't have to work late.
 c. I don't believe (the theory) that God is female. [結果]
 ≠ I believe (the theory) that God isn't female.

- (28) a. It isn't possible that dolphins are smarter than people. [察知]

- ≠It's possible that dolphins aren't smarter than people.
- b. It isn't uncertain whether dolphins are capable of metaphor. [評価]
 ≠It isn't uncertain whether dolphins are capable of metaphor.
- c. It doesn't appear that chimps will ever learn to use the subjunctive. [意向]
 = It appears that chimps will never learn to use the subjunctive.
- d. It isn't certain that beer is good for you. [結果]
 ≠It's certain that beer isn't good for you.

なお、連結的知覚動詞構文の証拠性用法にも、否定辞繰り上げの現象が観察される (Gisborne 2010: 278)。

- (29) a. Jane sounds like she's not very old.
 b. Jane doesn't sound like she's very old.
 c. Jane seems like she's not very old.
 d. Jane doesn't seem like she's very old.

(Gisborne 2010: 278)

以上のコントロールサイクルの枠組みを、Gisborne の提示した連結的知覚動詞構文の 3 用法に適用する。

3.2.3 コントロールサイクルによる記述と考察

連結的知覚動詞構文の証拠性に関わる用法に対してコントロールサイクルに基づいて考察する。(30) ~ (31) は Gisborne の 3 用法であり、(30), (31) はそれぞれ直接証拠用法・間接証拠用法の例、(32) は属性表示用法の事例の再掲である。また、(33) は (32) の構文と同等の意味を持つ叙述形容詞文である。

- (30) He sounds foreign. [直接証拠用法] (=13a)
 (31) (I've heard the forecast and) tomorrow's weather sounds fine. [間接証拠用法] (=14a)
 (32) This music sounds lovely (, *but it isn't really). [属性表示用法] (=12a)
 (33) This music is lovely. (作例)

2 種類の証拠性用法である (30), (31) はいずれもコントロールサイクルにおける意向段階に位置づけられる。推論を含む連結的知覚動詞構文は、認知主体の命題に対する判断が方向づけられる段階と考えられるためである。その一方で、推論を含まない価値評価の意味を表す属性表示用法の (32) は、be 動詞による客体的な叙述形容詞文である (33) と同じく、

結果段階に位置づけられる。ある命題を主体が確信している状態、つまり、命題内容が事実であると主体が認識していることが示される。

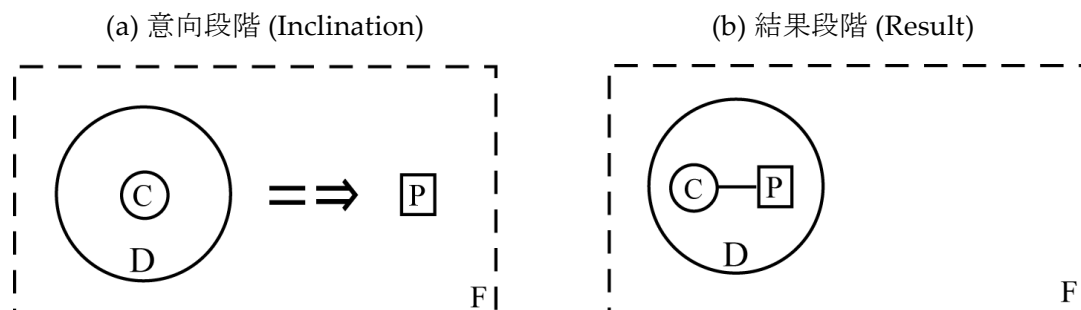


図4 意向段階と結果段階

この事実は、定形節における法助動詞の共起の有無と並行している。(34)のように、法助動詞を含む定形節は意向段階を、法助動詞を含まない定形節は結果段階を表している。

- (34) a. She {may / might / could / should / will / must} be upset. [意向]
 b. She {is / was} upset. [結果]

3.2.4 連結的知覚動詞構文と定形節補文

ここでは、本論の分析が定形節補文をとる連結的知覚動詞構文にも適用可能であることを示す。like 節・as if 節・as though 節を伴う seem 構文や連結的知覚動詞構文では、コピー繰り上げ (copy-raising) または擬似繰り上げ (pseudo-raising) と呼ばれる現象が観察される。これは、「従属節内の主語が主節の主語に繰り上げられ、従属節内に同一指示的な代名詞のコピーが残る現象 (Gisborne 2010)」とされる。変形文法では、このような構文のペアが「同一指示制約」という変形規則に基づく派生関係をもち、同一の意味を表すと分析する。認知言語学では、言語の形式のちがいが意味のちがいに反映していると考え、抽象的な統語操作を仮定しない。また、非繰り上げ構文に現れる it は伝統的に「虚辞」と呼ばれ、「意味を持たない」要素と分析されてきた。

しかしながら認知文法では、このような it の意味の分析を重視し、このような it は「抽象的なセッティング」として規定する。さらに近年の Langacker (2002, 2008, 2009) の枠組みでは、抽象的なセッティングなどそれまでの記述を踏襲しつつ、さらに、非人称構文の主語 it は命題に関連する意識のスコープと記述される。この意識のスコープは、コントロールサイクルにおけるフィールド (F) と一致し、セッティングの一部として規定されるため、認知文法の従来の分析とも整合し、コントロールサイクルなどのモデルと共に理論的装置として用いられている。

以上の意識のスコープとする Langacker (2002, 2008, 2009) の規定と、Langacker (1995) や Langacker (2009: 321) による繰り上げ構文の分析をもとに、連結的知覚動詞構文のコピー繰り上げ現象をコントロールサイクルの図式を用いて示す。

(35) a. It sounds like/as if/as though Jane won.

b. Jane_i sounds like/as if/as though she_i won.

(Gisborne 2010: 269)

(36) a. It looks like Mary is going to leave here. (作例)

b. Mary looks like she is going to leave here. (作例)

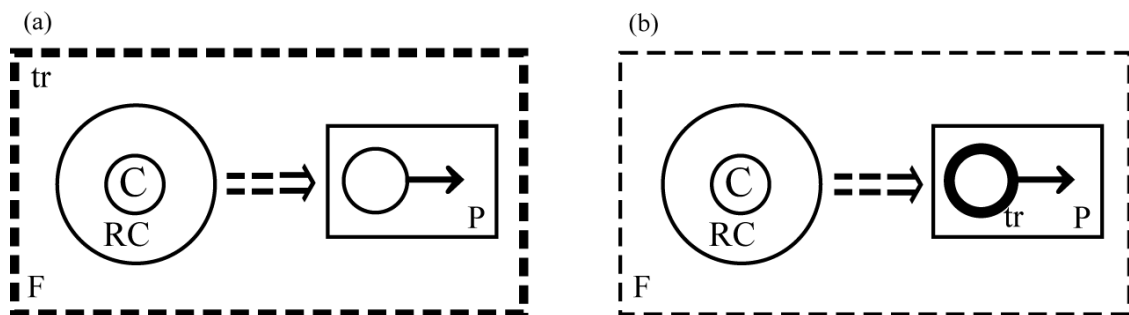


図5 コピー繰り上げ現象

(35), (36) の各 a, b の認知図式はそれぞれ図5のようになる。(a) では主語位置の抽象的なセッティングである it がトラジェクターとして際立ちをもつため、主体の認識的な領域であるフィールドが際立つ。一方、(b) では、命題内の主語と同一の指示対象である存在 Jane, Mary がトラジェクターであり、プロファイルされる。構文間の意味の相違は、プロファイルの相違に還元できる。

3.2.5 より周辺的な現象への応用

コントロールサイクルによる記述は、さらに、Gisborne (2010) が挙げたより周辺的な現象にも適用可能である。Gisborne は (37) の例文を挙げ、これらの主語は動作主的に解釈され、知覚プロセス全体として主語の指示対象の意図的な行為のように捉えられると述べている。このことは認知文法の枠組みで説明でき、アスペクトや動作主の意図を喚起させる要素の共起によるものと考えられる。

(37) a. Jane is looking scary (to frighten off the boy she doesn't want to date).

b. Jane is sounding angry (to hide the fact she's scared).

c. Jane is deliberately looking scary.

d. The teacher is deliberately sounding angry.

(Gisborne 2010: 265)

- (38) a. Jane looks scary. (作例)
 b. Jane sounds angry. (作例)

進行相でない (38) のような連結的知覚動詞構文は、未完了プロセスと解釈される。一方、Gisborne が挙げている事例は進行相であり、完了的に解釈される。さらに、行為の目的を表す *to* 不定詞による副詞節や、*deliberately* のような様態副詞の共起から、プロセスの意図性が属する存在が表現に含意される知覚者ではなく、トラジェクターの *Jane* であることは自明である。(37a) についていえば、*Jane* は言うまでもなく意志をもった人間であるため、彼女自身が恐ろしい様子を「見せている」（と見た者に感じられる）という解釈は極めて自然である。したがって、知覚の主体から見て、*Jane* はその知覚の対象であると同時に、そのように「見せている」動作主であるという解釈が生じると考えられる。コントロールサイクルにおいては、プロセスが有界的・完了的に解釈されることから、活動段階に位置づけられるものとみなすことができる。

ただしこういった用法⁶がアスペクトの変化や意図を表す要素の共起によって生じることを考えると、多くの先行研究が示す通り、当該構文のプロトタイプは状態的な文であり、ここで扱った意図的・活動的解釈をもつ文は拡張的な用法とみなせる。しかしながら認知言語学・認知文法の枠組みでは、こういった用法も柔軟に取り込むことが可能である⁷。

3.3 連結的知覚動詞構文の示す証拠性

3.2 節では、叙実性の議論に対してコントロールサイクルを援用し記述した。この節では、連結的知覚動詞構文の示す証拠性の多様性について述べる。まず、Aikhenvald (2004: 63) による証拠性の類型を参照し、英語の連結的知覚動詞構文が非常に広範な証拠性を示すことについて述べる。

Aikhenvald (2004: 63) は類型論的研究から、文法的証拠性の類型として最大で 6 種類の証拠性が存在すると述べている。それらは(i) 視覚的 (*visual*)、(ii) 感覚的 (*sensory / non-visual*)、(iii) 推論的 (*inference*)、(iv) 仮説的 (*assumption*)、(v) 伝聞的 (*hearsay*) (他者からの伝聞的情報)、(vi) 引用的 (*quotative*) (他者の発言等の引用) に分かれる。(i), (ii) は感覚的証拠性に関わる分類であり、前者が視覚による証拠、後者は視覚以外の感覚モダリティによる証拠である。(iii), (iv) は推論に関わる証拠性であり、前者が明確な証拠や結果状態に基づく推論に対し、後者は明確・具体的でない証拠に基づくもので、論理的思考や一般的知識、推測などを含む。(v), (vi) は報告的証拠性の下位分類であり、前者は引用元のない報告的証拠、後者は引用元が明らかな報告的証拠である。以上をまとめると以下の表のようになる。

表3 証拠性の分類

	Aikhenvald の分類	性質
1. 感覚的証拠性	(i), (ii)	感覚モダリティ
2. 推論的証拠性	(iii), (iv)	推論
3. 報告的証拠性	(v), (vi)	他者の発言・思考及びその内容 (cf. 報道)

(iv) の仮説的 (assumption) 証拠性に関しては、look, sound の構文の一部が該当する。特に、3.2.4 節で見た抽象的なセッティング it を主語に取る非人称用法では、認知主体と情報源との関係（主体が当該の命題を認識するに至る過程）がより抽象的で不明確である事例が見られる。このような構文はとりわけ look, sound の構文で発達しており、it looks {like/ as if/ as though} ...といった補文導入節 (complement-taking clause) が話し手の主體的な認識を表す構文として慣習化していることも関係している。

(39) It looks like there could be a concerted effort on the part of our government to quietly help Iraq through this sleepy little program that USDA called the loan guarantee program so as not to offend Israel.

(COCA)

こういった事例の述語は、本来の知覚の意味ではなく、より抽象的な推論を表していると思われる。

また、(40) は視覚・聴覚動詞 look, sound の報告的証拠性（特に引用的証拠）の事例である。

- (40) a. *And from everything I've seen on the news, it looks like he's taking every precaution possible to make sure that this virus does not spread.*
 b. *That's the state treasurer, Richard Mourdock, who according to polls looks like he is going to defeat Senator Richard Lugar in the primary on Tuesday, although who knows?*
 c. *... from what has been reported, it sounds like these are new primary melanomas, not recurrences of the previous one, which would be the most favorable situation*
 d. *... according to the police report, it sounded like he had shot my dog right in front of the kids.*
 e. *The president's speech, according to an American who heard it, sounded like a campaign address to an American Jewish audience.*

(いずれも COCA からの事例、斜体は筆者による)

以上の各事例では、斜体の前置詞句で表されるように、命題内容が他者から間接的に得た情報である。それぞれ、(a) では「ニュース」、(b) では「世論調査」、(c) では「報告」、(d) では「警察の報告」、(e) では「大統領の話を聞いた人の発言」を介して知識を得ていることが示される。

ここまでに見た当該構文の各事例と、それらが示す証拠性をまとめたものが以下の表である。

表 4 連結的知覚動詞構文が示す証拠性

	look	sound	smell	taste	feel
i. 感覚的 (sensory)	✓	✓	✓	✓	✓
ii. 推論的 (inference)	✓	✓	✓	✓	✓
iii. 仮說的 (assumption)	✓	✓			
iv. 伝聞的 (hearsay)	✓	✓			
v. 引用的 (quotative)	✓	✓			

2.1 節で見たように、英語の知覚動詞構文は語彙的証拠性を示すが、各感覚モダリティの身体論的性質やそれぞれの主体性（主体化の度合い）、さらに it の非人称用法の多様性などの要因により、以上のように情報源に関わるさまざまな意味が観察される。

4. まとめ

本論文では、知覚動詞構文の証拠性用法に関して記述を試みた。Gisborne (2010) で提案された連結的知覚動詞構文の用法の分類に関して、経験者主語構文と比較するかたちで考察を行い、主に認知文法の立場から、知覚動詞の背後にある我々の知覚経験や叙実性・証拠性などの認識的概念を中心に記述した。特に、Langacker (2002) のコントロールサイクルの理論に基づく包括的な認知モデルにより、当該構文で観察される直接性の相違や、それによる叙実性の差異などを、より一般的なレベルで示した。そこでは、Gisborne (2010) における 2 種類の証拠性用法はいずれも意向の場面に位置づけられ、一方で、属性表示用法は結果段階に位置づけられることを明らかにした。さらに、本論で行った分析は、これまであまり考察されてこなかった当該構文が許す動的な解釈に対する示唆を含むものでもある。

本論文で扱った言語現象は、モダリティに関わる諸問題の記述・説明を目指す長きにわたる理論的研究の一部に位置づけられる。これまで、認知言語学の枠組みに基づいて叙実性や証拠性に関して分析を行った研究はあまり見られなかったが、それらの概念に関する言語現象の記述・説明の妥当性を示したという点においても本研究の意義を見出すことができる。

注

1. 証拠性とモダリティ（特に認識的モダリティ）との関係についての議論は盛んに行われているが、本論文では深く立ち入らない。Aikhenvald (2004)などを参照されたい。
2. 英語には体系的な文法的証拠性は見られないとされるが、法助動詞 *must* に証拠的な用法を認める考え方がある (Anderson 1986, Palmer 1986, 澤田 2006 など)。以下のような例では、主体が得ている証拠に基づく確実性の高い推論が示される (Anderson 1986: 275)。

(i) The toast *must* have burned.

(Anderson 1986: 275)

3. 表1の *feel*, *taste*, *smell* の下付数字はこれらの動詞が3分類すべてに見られるということを示すために付されているものである。
4. 報告的証拠に関しては、一貫して非叙実的な解釈が伴うようである。(ii) は報告的証拠性を表す非叙実述語である。

(ii) a. I knew that the sun is over 93 million miles away from the earth, but { it's not true/ I don't believe it.}

b. I have heard that the sun is over 93 million miles away from the earth, but { it's not true/ I don't believe it.}

c. I have been told that the sun is over 93 million miles away from the earth, but { it's not true/ I don't believe it.}

d. I am aware that the sun is over 93 million miles away from the earth, but { it's not true/ I don't believe it.}

(中右 1983: 560)

5. このことは、連結的知覚動詞構文の表す推論のプロセスにおいて、経験者と知覚対象との相互作用の内実が複雑であることと関係している。

(iii) a. He looked tired; his eyes were pouchy and his clothes were rumped as if he'd been in them a long time.

b. He came up, once - he looked surprised more than anything else, his face deathly white, his mouth a black O - and then disappeared again and did not come back up.

c. He sounded nervous, his voice catching on his first words.

(iv) a. "Looking back, not really," I said. "But when I saw you, I thought, here is someone I might truly love." "That's really moving," he said. He sounded sincere.

- b. Peter was shouting something, he (=Edward) couldn't catch the words,
but heard the notes. He (=Peter) sounded happy and excited.

((iii), (iv) はいずれも COCA からの事例)

(iii) の各文はいずれも、知覚動詞構文に後続する内容が、当該の推論を導く具体的な証拠となっている。(iii-a) では、彼全体を参照点として、彼の風貌から推論される彼の状態 (tired) を動機付ける視覚的な根拠が、後続する内容 (his eyes were pouchy and his clothes were rumpled as if he'd been in them a long time.) で詳述されている。

その一方で、(iv-a) の下線部では、彼の “That's really moving.” という発話を受けて、聞き手が誠実 (sincere) だと感じたことが表される。この例での動詞 sound は彼の声色や言い方、言葉遣い、またはそれらすべてを総合的に判断材料にしている可能性があるという点で曖昧である。一方、(iv-b) の文脈では Edward は Peter が何と言ったか (叫んだか) に関しては不明であるが、その音 (つまり Peter の声の調子) だけは聞こえている。つまり、Peter の状態 (happy and excited) は彼の声色から判断したものと推察される。

6. この言語現象に直接言及する先行研究は管見の限りにおいてほとんどないが、山岡 (1993) による、視覚動詞 look の進行形の構文と単純形の構文との比較考察が関連する。山岡 (1993) は、知覚動詞 look が進行形で用いられる場合、知覚対象の表情や様子に対する意識の集中があり、対象への主体の関心が認められると述べている。
7. ただ、進行相の事例を含む、連結的知覚動詞構文をめぐるアスペクトや意図性に関する現象に対してはさらなる研究が望まれる。連結的知覚動詞構文の研究におけるアスペクトに関する分析・考察は単純形のものを対象としているものが支配的であり、状态的 (stative) な解釈を持つ事例が扱われるにとどまっているためである。ここで挙げた Gisborne (2010) に関しても、語用論的含意により意図性が見出すことのできる進行相の事例を扱ってはいるが、進行相をとる連結的知覚動詞構文の全体像を描出するには至っていないといえる。

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Anderson, Lloyd B. 1986. Evidentials, Paths of Change, and Mental Maps: Typologically Regular Asymmetries. In Wallace Chafe and Johanna Nichols (ed.) *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, 273-312. Norwood, NJ: Ablex.
- Chafe, Wallace and Johanna Nichols. (ed.) 1986. *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*. Norwood, NJ: Ablex.
- Dik, Suzanne D. and Kees Hengeveld. 1991. The Hierarchical Structure of the Clause and the Typology of Perception-Verb Complements. *Linguistics* 29: 231-259.

- Dixon, Robert M. W. 1992. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon.
- 深田智. 2001. 「'Subjectification' とは何か: 言語表現の意味の根源を探る」 『言語科学論集第7号』 61-89.
- Gisborne, Nikolas. 1998. The Attributory Structure, Evidential Meaning, and the Semantics of English SOUND-Class Verbs. *UCL Working papers in Linguistics* 10: 1-26.
- Gisborne, Nikolas. 2010. *The Event Structure of Perception Verbs*. Oxford: Oxford University Press.
- Gruber, J. 1967. Look and See. *Language* 43: 513-527.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky. 1970. Fact. In Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph (ed.) *Progress in Linguistics*, 143-173. The Hague: Mouton.
- Langacker, Ronald W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1995. Raising and Transparency. *Language* 71: 1-62.
- Langacker, Ronald W. 2002. The Control Cycle: Why Grammar is a Matter of Life and Death. *Proceedings of the Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 2: 193-220.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Leech, Geoffrey N. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- 中村文紀. 2010. 「連結詞的知覚動詞構文と様態制約: 知覚者と知覚対象の際立ちの観点から」 『日本認知言語学会論文集第10号』 438-448.
- 中右実. 1983. 「文の構造と機能」, 安井稔・中右実・西山佑司・中村捷・山梨正明. 『意味論』 548-626. 東京: 大修館書店.
- Palmer, Frank R. 1986 [2001]. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 澤田治美. 2006. 『モダリティ』 東京: 開拓社.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge [England]; New York: Cambridge University Press.
- Taniguchi, Kazumi. 1997. On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective. *English Linguistics* 14: 270-299.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京: ひつじ書房.
- Verhagen, Arie. 2005. *Constructions of Intersubjectivity*. Oxford: Oxford University Press.
- Viberg, Arie. 1983. The Verbs of Perception: A Typological Study. *Linguistics* 21: 123-62.

Whitt, Richard J. 2011. (Inter)subjectivity and Evidential Perception Verbs in English and German. *Journal of Pragmatics* 43: 347-36.

山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京: ひつじ書房.

山岡實. 1993. 「談話における進行形と単純形—状態動詞としての look の場合—」 『英語青年』 138(11): 8.

安井稔・中右実・西山佑司・中村捷・山梨正明. 1983. 『意味論』 東京: 大修館書店.

コーパス

Corpus of Contemporary American English (COCA)

A cognitive grammar approach to the evidential uses of English perception verb constructions

Wataru Kono

This paper describes the uses of copulative perception verb construction (abbreviated as “CPVC”, e.g. *He looks happy.*), especially in terms of evidentiality and factivity and analyzes them utilizing the control cycle model. With respect to evidentiality, Gisborne (2010) recognizes three uses: ‘attributory use’, ‘evidential-1 use’, and ‘evidential-2 use’ on the semantico-pragmatic basis. In Section 2, previous studies on evidentiality and perception verbs are examined; after reviewing the definition on evidentiality argued in Palmer (2001) and Aikhenvald (2004), the literature regarding CPVC and the related construction such as the experiencer-based perception verb construction is critically examined. It is argued that the previous studies have attempted to capture the phenomenon itself, although it lacks investigations on the fundamental mechanism, that is, motivation on the development of CPVC. In Section 3, I introduce a theoretical model, the Control Cycle, which is a general cognitive model advocated by Langacker (2002). In this model, a variety of processes are schematized as a cycle in which an entity (an actor) becomes aware of the existence of a target entity (a target), captures it and takes it under control. This model is highly generalized to describe many kinds of processes, from physical processes to perceptual, epistemic, and social processes. The model consists of four basic “phases”: Baseline, Potential, Action, and Result. In particular, the Epistemic Control Cycle is used to describe epistemic processes, which consists of three potential stages: Formulation, Assessment, and Inclination. The analysis adopting the control cycle shows that the attributory use is located in the result phase, whereas both evidential use (Evidential-1 use and Evidential-2 use) are located in the inclination phase, which indicates that the process profiles a provisional judgment. This view is supported by the fact that the phenomenon “negative raising”, which pertains only to the inclination phase, can be seen in both evidential uses. It is important to mention that the distinction of inclination and result is also reflected in the presence vs. the absence of a modal.